

## 古事記を読む会

23号 (2016,10,2)

9月の古事記を読む会は、元富山県立図書館長 鷲本義昌先生により、「芥川の『老いたる素盞鳴尊』をめぐって」のテーマでお話いただきました。

イズミさんのブログには、その様子が詳しく紹介されています。

当日 いただいた 資料には、つぎの 5項目が 示されていました；

◇「芥川龍之介大事典」より 素盞鳴尊 すさのおのみこと

小説。[初出]「大阪毎日新聞夕刊」大正9年三月三十日～六月六日。四十五回の連載。[収録]『春服』(前半三十五回は単行本未収録。後半十回を「老いたる素盞鳴尊」と改題し収録。春陽堂、大正12年五月)。全集第六巻収録。



◇八雲立つ

◇炉辺の幸福

「侮蔑と捨象の対象でしかなかった実人生が、ようやく生にかかわってもつ不可避の意味を作家に問いはじめた」(三好幸雄)

◇十風五雨

◇夏の終(わり) 伊藤静雄

また、別紙として、小説「老いたる素盞鳴尊」全文(十回分)コピーが配布されました。つまり、「日本最古の古典『古事記』が、現代文学者たちにどんな影響をあたえたか」、「例えば芥川龍之介は、小説「老いたる素盞鳴尊」の中でなにをいいたかったのか」考えてみようということでした。

「大阪毎日(夕刊)」に45回にわたって連載しながら、後半十回分だけを「老いたる素盞鳴尊」と改題し収録」という事実経過の中に、小説家芥川の心情変化の過程が読みとれるというわけです。

スサノヲ命といえば、すぐに連想されるものの一つに「八雲立つ…」の歌があります。八雲立つ 出雲八重垣 妻籠みに 八重垣作る その八重垣を

この歌は、「スサノヲ命が作った」とされていますが、実は当時 いっぱんに歌われていた祝婚歌の一つだという説もあります。アシハラシコヲ[葦原色許男](大国主命)とスセリヒメ、あるいはその応援団の人たちが歌ってもよいわけです。

「八雲立つ 出雲八重垣」とは「スイートホーム」のことであり、「ロバタ[炉辺]の生活を楽しむ」姿です。漢語で「十風五雨」というのも、「十日に一度風が吹き、五日に一度雨が降る」という現実生活の楽しみをうたったコトバです。

ただし、文学者・小説家ともなれば、『古事記』の記事をただ現代語に訳しただけではどうにもなりません。なんとかして独自の「小さな説」を立てる必要があります。芥川が『古事記』の「スサノヲ命」を題材として小説を書きはじめ、やがて後半十回分だけを改題して収録したことは、さきほど紹介したとおりですが、そのことは彼がそれだけ真剣にスサノヲととりくみ、七転八倒させられたことを示しています。

小説「老いたる 素盞鳴尊」の中で、作者の目はスサノヲの目と同調しています。最愛のひとり娘をもつ父親が、娘の恋人を見る、その目です。娘の恋人・アシハラシコヲを「ハチのムロ」,「オロチのムロ」へ閉じこめる。さらには枯草に火をはなち、その炎と煙で焼き殺そうとする。しかし、スサノヲとスセリヒメとアシハラシコヲとの人間関係に、やがて転機がおとずれる。若い男女のキズナが父と娘のキズナをふり切って、スサノヲの家から脱出計画を実行する。

ふたりが乗った舟が遠ざかるのを見て、スサノヲはすぐ弓に矢をつがえてひきしぼるが、矢はついに弦をはなれることがなかった。

やがて弓矢をおいたスサノヲが、二人にむかって祝福のコトバをおくる。

「おれよりも もっと タチカラ[手力]を 養え」

「おれよりも もっと チエを 磨け」

「おれよりも もっと し合せに なれ」

あれほど憎み、痛めつけてきた若者にむかって、ある日 とつぜん祝福のエールをおくる。この豹変ぶりをどう解釈すればよいか？むつかしく考えれば、たしかにむつかしい問題ですが、じっさいには、現代社会でもよく見たり聞いたりする現象だともいえそうです。最愛の娘のムコ殿にたいしてはきびしいテストをする。そのテストに合格したとなれば、一転して、応援にまわる。そう解釈する人もいるでしょう。また、どれほど強い人間でも、やがて老人となり、死の日をむかえる。最愛の娘に恋人ができ、親の手がとどかないところへ立ち去る日が来る。そう考える人もいるでしょう。

時間の制約もあって、伊藤さんの講話では、さいごの項目「夏の終り…伊藤静雄」について、くわしい解説をお聞きできませんでした。あとでネットでしらべると、こんな記事が見つかりました。

### 夏の終り

夜来の 颯風に ひとり はぐれた 白い 雲が  
気のとほくなる ほど 澄みに 澄んだ  
かぐはしい 大気の 空を ながれて ゆく

太陽の燃えかがやく野の景観に  
それがおほきく落す静かなかげは  
……さよなら……サヤうなら……  
……さよなら……サヤうなら……  
いちいちさううなづくまなざしのやうに  
一筋ひかる街道をよこぎり  
あざやかな暗緑のみずた[水田]のおもてを移り  
ちひさく動く行人をおひ越して  
しづかにしづかに村落の屋根屋根や  
樹上にかげり  
……さよなら……サヤうなら……  
……さよなら……サヤうなら……  
ずっとこの会釈をつづけながら  
やがて優しくわが視野から遠ざかる

\*昭和21年(40歳)『文化展望』10月号、後に『反響』に所蔵。

この「夏の終り」は、1946年つまり戦後間もない頃の作品で、伊藤静雄が40歳の時のものである。24歳から詩を書いて発表し始め…1945年には発表作品はない…1949年に肺結核を患い、そのまま入院生活を送り、1956年にこの世を去っている。

以上、『古事記』スサノヲ命から、現代の小説家芥川龍之介・詩人伊藤静雄にいたるまで、いっしょに考えあわせてみるということで、わたしとしてはめったにできない勉強をさせていただきました。

### 『古事記』の読み方について

『古事記』の読み方については、さまざまな読み方があってよいと思います。自分の好きなテーマをえらび、得意とする研究方法によって研究をすすめながら、まったく別のテーマや方法による研究者の報告を聞くことで、意外なヒントが得られることもあるでしょう。

わたしのばあいは、やはりコトバの音声面にこだわって、『古事記』を読みつづきたいと思います。たとえば「スサノヲ命・スセリ姫・アシハラシコヲ」などというナマエの意味をさぐりたいと思います。アマテラス[天照](大神)やオホクニヌシ[大国主](神)などは現代語との関連がつかめますが、スセリやシコヲとなると、「それ、日本人のナマエなの？」とたずねたい感じになったりします。

現代日本語の実態は、ヤマトコトバ・漢語・カタカナ語などのチャンポン語ですが、ヤマトコトバの実態も「ヤマト地区のコトバを中心に、日本列島各地のコトバをとりこんだチャンポン語」だったと考えられます。

人名・地名などには、命名当時の**貴重な情報**がこめられているとされています。「テル[照]ものがテラ[寺]」というヤマトコトバの**原則**が分かれば、アマテラス派(神道グループ)が**テラ派**(仏教グループ)のテラという語音を禁句とした理由もわかってきます。スサノヲ・スセリ・シコヲなどがヤマトコトバだとすれば、ヤマトコトバの中に同源・同系・同族のコトバがあるはずですが、まず**ヤマトコトバの戸籍台帳**をできるかぎり整備することが必用。これができれば、やがて日本語と外国語との音韻比較の道も開けてくるでしょう。

以上イズミさんのブログ「[いたち川散歩](#)」を紹介しました。

イズミさんは、研修会のあといろいろ、調べ、考察の記録を具に残しておられます。

古事記に対する独自の研究方法を持って、すすめておられる姿にいつも敬服しています。

ヤマトコトバの戸籍台帳の整備にむけて、是からも頑張ってください。

また、是からも、コトバについての見解を会員にお伝えいただきたいと思います。

#### 会員の意見

- ・ 芥川はなぜ書けなかったか？ 漢詩→現代語訳。古事記→訳がある。さらに文学作品として高いものにするのは難しい。

出雲はスサノオに対する信仰心が高い。出雲は風土をうまく詠み込んだ。

- ・ ツルギとタチの使い分けが気になる。スサノオのもつ十つかツルギ、みあかしのは欠けき。タチありき、つるぎをつかってタチを得たり。

TRG TT 形なのか材質なのか？どちらが先進的であるか？

- ・ 祝婚歌 子孫にエールを送る。威厳に満ちていてよい結び。
- ・ 小説と古典の繋がりをみた。日本人にあったものを文学作品に表す。

次回は ということで

10月3日は、

- ① 服部先生の小提案、②「老いたるスサノオ」に該当する古事記を本文を読む等……。

11月13日の提案 ( )

12月4日の提案 ( )

29年2月5日の提案 ( )

3月5日の提案 ( )

先日は、芥川著の『老いたる素盞鳴尊』を紹介いただき、内容のある有意義なご講話をいただきありがとうございました。作家芥川がその時代に古事記をどう読んだかがとても気になる所でした。そして、久しぶりの文学者との出会いは、とても新鮮でした。

『古事記を読む会』で「大国主神の段 根の国堅州国訪問」で何度か読んだはずの文面をもう一度たどり、しっかり読む必要を感じました。まだまだ、わからないことばかりです。ですから、今回のような視点で問題意識をもって読み直すために大変よいお話でした。

『古事記』の編者・解釈を巡って今も不明な事が多い中、芥川氏の古典をテーマに編んだ小説が、結末も明るく、次代に期待を寄せるものになっていることは、読む者にとっても嬉しく、ある時期、生きる事へ積極性があつたのか、または、自分が絶望的なだけに子どもへの願望が大きかったのかなどと考えました。私は、文学に触れる機会が少ないので、久しぶりに鷺本先生の授業を聞かせていただいた様で（高校生時代の）若い気分にもなりました。

鷺本先生には、平家物語の冊子を会員みんなへプレゼントしていただきありがとうございます。また、たくさんの準備をしていただき大変手数をお掛けしました。今後とも少しずつ古事記を読む事を続けていきますので、機会がありましたら何卒よろしくご指導ください。それにしても、恩師がお元気で近くおられ、今も教えて頂いていることよい環境に感謝致しております。是からもどうぞよろしくお願い申し上げます。妹も古典の心を現代文で教えていただいたと喜んでおりました。

先日、敬神婦人会の総会へ出席のため神戸へ行き、淡路島のイザナミ神宮を参拝してきました。付近には平家物語の歴史があちこちに残っているようでした。いろいろあってお礼状が遅れましたことをお詫び申し上げます。

9月8日